

新たに発見された金皇寺の文化財について

(1) 金皇寺の概要

大田市仁摩町大国にある浄土宗の寺院。山号は保国山^{やすくにさん}。戦国時代の元亀元（1570）年に石見銀山の極楽寺住職・良休^{りょうく}によって創建されたと伝わる。石見銀山にある他の寺と住職同士の交流が存在したほか、石見銀山の住民も檀家としていた。金皇寺のある大国地区は石見銀山の麓に位置するが、歴史的に見て銀山と深いつながりがあった。

(2) 概要

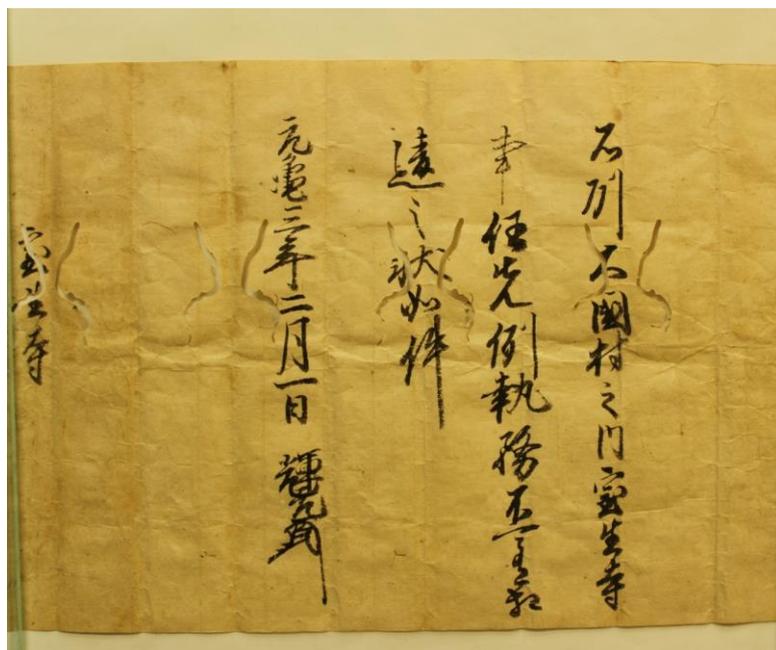
金皇寺で新たに発見された文化財は古文書が大半を占める。古文書とは紙に書き記された手紙や記録、証拠書類などのこと。中世～近代に至るまでの長い間の古文書が保存されていたが、主に下記の点で貴重な存在といえる。

- ①金皇寺には今まで十分に知られていなかった新発見の中世文書が残されていた点。
- ②石見銀山とその周辺地域において戦国時代までさかのぼる古文書が複数確認できるケースは非常に珍しく、大田市内でも有数の古文書が新たに見つかった点。
- ③毛利氏・吉川氏などの古文書からは、毛利氏による石見銀山支配の様子とその移り変わりを知ることができる点。

(3) 主な史料の紹介

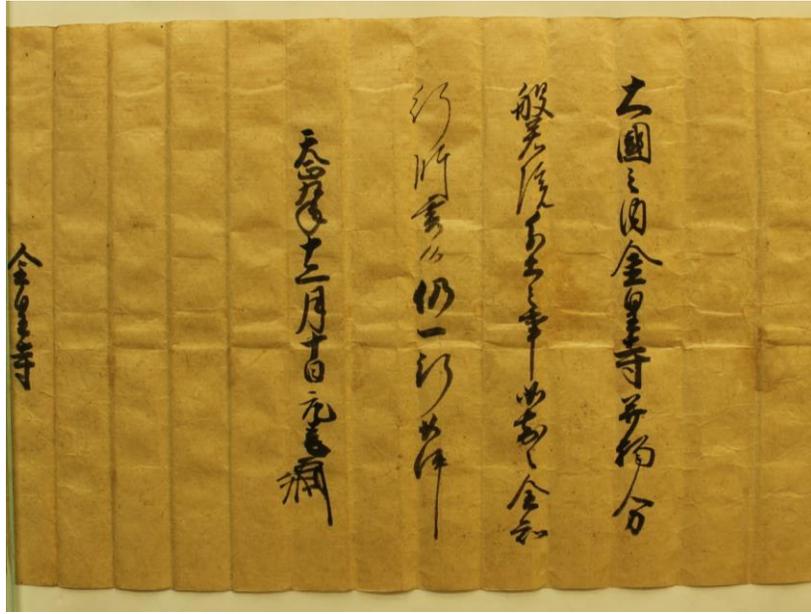
【毛利輝元安堵状^{もうりてるもとあんどじょう}】（元亀3年（1572）2月1日）縦 27,1 cm 横 38,6 cm

石見銀山を支配していた戦国大名・毛利輝元がこれまで通り宝生寺を保護することを認めた文書。宛先の「宝生寺^{ほうしょうじ}」は、金皇寺の末寺（配下の寺院）に当たる寺院だが、現存しない。この文書が発給された前年、輝元の祖父・毛利元就^{もうりもととなり}が死去しており、輝元は後継者となったことを内外に示すために、石見銀山周辺の寺社に安堵状を発給したと思われる。



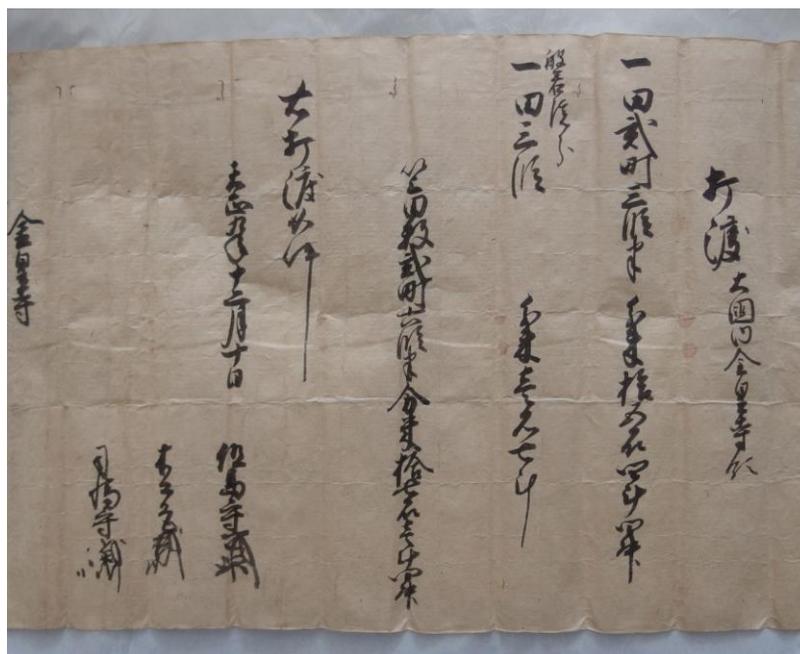
きつかわもととはるあんどうじょう
【吉川元春安堵状】(天正9年(1581)12月10日)縦29,0 cm 横45,0 cm

天正9年当時、金皇寺のある大国村の領主は吉川元春であった。この文書は吉川氏が金皇寺の持つ土地の保護を認めた安堵状である。当時、山陰地方では織田信長と毛利輝元の争いが激化しており、元春も鳥取方面に出陣中であった。元春は不穏な情勢を受けて、自らの所領にある寺院を保護することで足場を固める思惑があったかもしれない。なお、金皇寺の記録によれば、金皇寺は元春の保護を後世に至るまで感謝し、元春の位牌を本堂に安置していたようである。



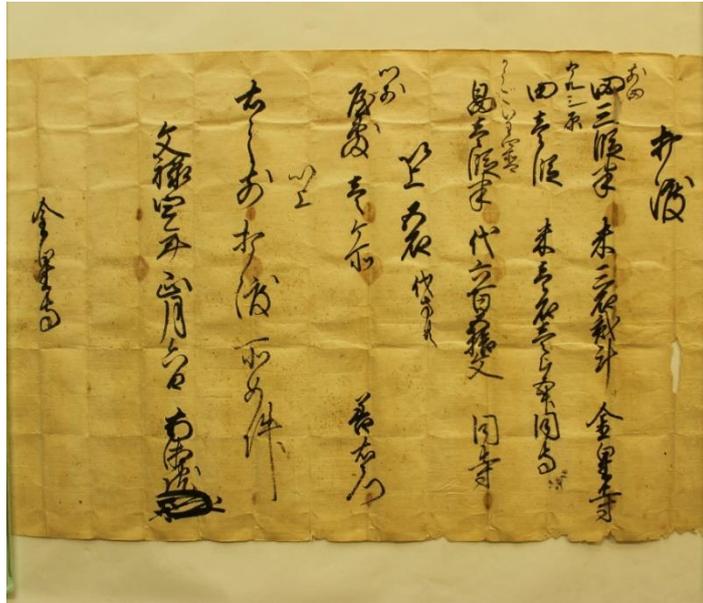
きつかわしぶぎょうにんれんしやうちわしじやう
【吉川氏奉行人連署打渡状】(天正9年(1581)12月10日)縦29,3 cm 横43,5 cm

吉川元春の安堵状を受けて、同じ日付で家臣3名が出した打渡状。打渡状は土地の安堵や引き渡しの際に出される文書のことで、この時安堵された具体的な土地の内容が記されている。



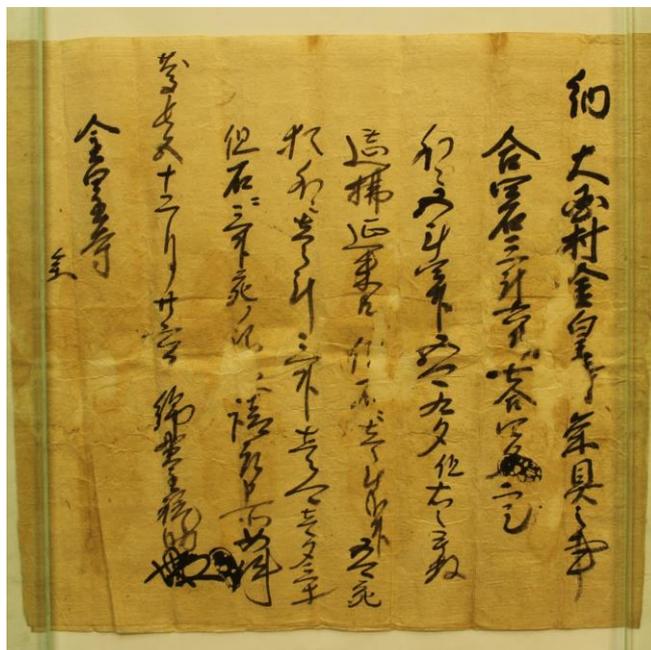
^{なんしやういんうちわたしじやう}
【南湘院打渡状】（文禄4年（1595）正月6日）縦31,5 cm 横49,4 cm

毛利氏の銀山代官・南湘院が出した打渡状。文禄年間（1592～96）になると、吉川氏に代わって毛利氏が大国村を支配していた。大国村のような銀山周辺の村々を銀山代官が支配するようになったのは、毛利氏の石見銀山支配が強化されたためと考えられる。天正20年（1592）、豊臣秀吉が朝鮮出兵を開始し、毛利氏は銀山支配を強化することで朝鮮出兵に伴う軍事費負担に対応する思惑があった。本史料からは、毛利氏の銀山支配の変化を知ることができる。



^{わたぬまきちからのすけねんぐうけとりじやう}
【綿貫主税助年貢請取状】（慶長5年（1600）12月26日）縦27,0 cm 横29,5 cm

毛利氏家臣・綿貫主税助が金皇寺から納められた年貢を受け取った際に出した文書。慶長5年12月は既に関ヶ原の戦いが終わった時期であり、石見銀山の支配者は毛利輝元から徳川家康へ交代していた。石見銀山を去る前に毛利氏が徴収していた年貢のことを指している可能性、綿貫氏が新たに徳川氏の下で役人として働いていた可能性、「慶長五」の年号が追筆である可能性などの諸説が考えられる。毛利氏から徳川氏へ支配者が交代する前後の様子は不明な点が多く、今後の研究が必要である。



【扁額「保国山」】（明治26年（1893）8月、品川弥二郎書）縦52,0cm 横167,0cm

金皇寺の本堂に掲げられていた扁額。裏面に記された文字によれば、明治26年8月に前内務大臣の品川弥二郎が大国村の安井好尚の屋敷で揮毫したと墨書されている。品川弥二郎は幕末に松下村塾で学び、尊王攘夷運動に奔走。明治維新後はドイツ駐在 日本公使や内務大臣などをつとめたほか、獨協大学の創立に関与した人物。一方、安井好尚は近代農法の導入や私立大国英和学校創立など地域振興に尽力した人物であり、地元大国には顕彰碑が建立されている。当時の新聞記事（『山陰新聞』明治26年8月19日）によれば、大森から大国の永久鉦山を巡った後に安井家を訪ねたとあり、この時依頼に応じて筆をとったものと考えられる。

